

デュパンの『フランスの服飾』

大革命直前の版画集で本図書館所蔵の服飾版画コレクションの中でも独自の価値を持つ稀観書である。タイトルは、『フランスの服飾：王国におけるさまざまな身分階級を示すフランスの服飾、批評的かつ道徳的な考察を付した各階層固有の衣服』（LES COSTUMES FRANÇOIS Representans Les differens Etats du Royaume, avec les habillemens propres à chaque Etat et accompagnes de Reflections critiques et morales, 1776.）〔383.135-C〕となっており、パリのサン・ジャック通りの版画屋が1776年に出版した、ピュラン版による無彩色の10枚の銅版画集である。1776年といえば、例の画期的な服飾版画集であるガリニー・テ・モード・エ・コスチューム・フランセ〔383.135-C-1~4〕に先立つこと2年、保存資料の僅少な年代である。さらに、さまざまな階層の人々の衣服を捉えることができるこの版画集の持つ史料的価値は極めて高い。

版画師はリッパーハイテやコロの文献目録ではガリニー・テ・モードにも才さいを示したニコラ・デュパン（Nicolas Dupin, 1753—没年不詳。ただし1791年の作品が確認されている）と、記されている。ベネズィの美術家辞典によると、単にデュパン弟もしくは子（Dupin le jeune）と記されている。（デュパン一家は18世紀全般にわたって仕事をした版画師の家系である。注。）この『フランスの服飾』10枚の版画中、サインの認められるのはNa6とNa10の2枚のみで、しかもごく微かかにdupinという小文字で綴られている。（この後に刷られたものにはDupinというサインを多く残している）この版画集は、23歳のニコラ・デュパンにとって、名前を入れた初めての作品だったのかもしれないし、ひよつとすると親子ないしは兄弟の合作であったのかもしれない。作者に関する手懸かりはこ

助手（西洋服装史） 斎藤 多香子

れ以上は不明である。誰が下絵を描いたのか、解説者は誰か、なども詳らかではない。旧体制への批判の色濃いこの版画集は、当初から作者名を伏せて出版したなどということもあるのであろう。しかし、作者と作品とは、ある水平面に立てば別箇の存在であり、ここでは版画の1枚1枚が私たちに語っている言葉を、そのまま吟味することこそ、最も大切なことなのである。

10枚の版画には、次のようなタイトルがつけられ、さらになりに長い解説文が加えられている。

- I. 貴族と貴夫人 II. 司教と女子大修道院長
III. 司法官と武官 IV. 修道士と修道尼
V. 徴税官と修道院長 VI. フルジョワの男女
VII. 医者 VIII. 職人：左官屋と洗濯女
IX. 庭師と農家の女 X. 貧者の男女

貧者をも含むこの配列は、当時の身分階層の捉

①庭師と農家の女 やや美化されていると思われる。

(Pl. IX)



え方を示して興味深い。解説者は、貴族や莫大な富と権力を掌握していた司教や司法官には、直裁にはないが暗に鋭い筆鋒をふるう。例えば、図②の貴族と貴夫人の説明では、「王から授けられた勲位を帯び、貴族の印である赤い踵の靴をはき、この踵で国家の敵を踏みつぶすのである。金持ちでうぬぼれ屋、これが貴族の特徴である。」という辛辣な調子である。貴夫人に対しては、「髪にあしらった羽飾りは、^{レシエルテ}軽快さ（軽薄さ）の象徴であるが、近頃では際立って惜し気もなく使われている。」（つまり、これは、貴夫人たるものは、ますます軽薄この上ない有様だ、ということを書外に表している）ブルジョワ階層に対してはどのような解説をしているだろうか（図③）。「ブルジョワジーとは、王国にとって最も重要な階層であり、（…）まさしくブルジョワジーこそが国庫を満たすのである。商人はブルジョワジーを羨望し、ブルジョワジーは貴族を羨望するが、というも、ブルジョワとは中途半端な貴族だからである。ブルジョワ紳士は、時には司法官のように黒い上着を用い、時には貴族のように飾り紐をほどこしたピロードの^{アヒ}上着を着る。ブルジョワ夫人は、貴夫人のように厚かましくもドレス全体に玉房飾りをつけたりはせず、それでいて、優雅でゆき届いた

装いである。」

この解説者は、不明であるが、多くの古典からの引用文や軽妙な諷刺に満ちた文章を綴ることのできた知的階級の人間であつたにちがいない。そして、この人物の庭師や職人、農民の階層に対する評価は高く、ルソー、ヴォルテールなどの当時の文芸思潮の影響も色濃く認められる。「耕作ほど楽しい生活はない。毎日、陽の出を^あ貴で、晴天の喜びを味わう。自然の与えてくれる美しい花々を摘み、自然の恵みである麦を刈り入れる。そして、素晴らしい果実が食卓を飾るのだ。…こんな人々の衣服は、それにふさわしい質実なものである。」（図①）

服飾は、常にさまざまな^{イヌス}観念化の格好の題材となりやすく、それらの装置をくぐり抜けると、一つの平坦な断面のみが、他の諸相を切り捨てた形で示される。資料に対する細やかな読みが要求される所以である。この版画集においても背景状況を考慮し、（たとえば、1775年には英国初の労働組合が結成されている）しかし、それが背景にすぎないことをも十分に踏まえて、真実の意味、虚構の意味を考えなければならない。

注. cf. Portalis et Béraldi: Les graveurs du XVIII^e siècle, vol II, p.73.(732.8-P) 他。



②貴族と貴夫人(Pl. I)



③ブルジョワの男女(Pl. VI)

両者の比較により、貴族とブルジョワの特質が明瞭になる。女性は髪飾り・スカートの装飾・引裾の差異、男性は、勲章や帯剣の有無、^{アヒ}上着・シルの装飾の差異が読みとられる。